



広島、国道2号線、青信号と女

国道2号線に通じる54号線沿いを、路面電車が走る。午前1時過ぎ、広島市。コンビニに行った帰り、歩道の柵に腰掛けた女がいる。タバコを吸い、どうやら人待ちでもなさそうで、目の前にあわよくば拾おうとするタクシーが一台、信号は青。僕は水色。

「何してるんですか」

僕はまったくの純粋な気持ちから、こんな夜中にただ座っているこのおそらく20代前半の女が何をしているのか聞きたかった。女は僕に目をやって、そのまま無言で視線を遊ばせた。

「コーヒーでもどうぞ」

僕はコンビニで買ったジョージアを一本、女にあげた。

「どうも」

女は遠慮なく（本当に遠慮の「え」の字もなかった）、コーヒーをひとくち飲み、タバコを2本吸って、それから気だるそうに口を開いた。

「別に何もしてないよ。強いて言えば、何もしないことをしているの」

彼女は静かに笑った。夜が少しだけ明るくなったような笑顔だった。

「ここの人じゃないでしょ？」

「東京から来た。仕事でね。君は？」

彼女ははにかんで、煙を吐いた。救急車が一台目の前を通り過ぎ、そのあとまた静寂が訪れた。彼女の足元にタバコの吸い殻が5本散らばって、僕はミンティアを17粒食べた。その間に、いくつかの退屈な会話を交わした。退屈だけどそれは時間が経つのを忘れさせる退屈さだった。世の中にはそういう種類の退屈な会話がしばしば発生する。

それから僕はホテルに戻り、ビールを飲んだ。たいてい一人で飲むときは、500mlを一缶飲み切ることができない。

国道2号線。

大学生の頃、友人O氏と大阪から広島県福山市の友人Y氏の家まで自転車で行ったときに、僕らにとってのシルクロードだった。晩夏に38時間かけて、大阪～兵庫～岡山～広島のルートを辿ったのだ。補給した水分はすべて汗になり、小便すら出ない。尻は異様に痛く、足は自分のものではないロボットのようにペダルを踏み続けた。

「トイレとは、思考（シッコ）と空想（クソ）をするところだ」

モザイク広場に書きなぐった学生時代のスピリットは、まだそこで日の光を浴びているのだろうか。

広島入りした次の日、仕事を終わると帰りの飛行機に飛び乗り、東京へ向かった。同期のみんなと飲むためだ。聞けば新橋に集合しているらしい。広島での滞在は、いつも短い。きっと誰かが、そう仕向けているのだろう。

膨張する夜

上あごの中心部から生えてきた歯を抜いたあとだった。

何かの申し子みたいな小さな歯、それは世界中で捨てられている乳歯とはまったく別の哀愁を漂わせている。それは何かしらの意図をもって僕を痛がらせたわけだし、その意図を削がれた歯の気持ちにもなってみたい気がした。

「都内にある歯科医院の数ってね、都内にあるコンビニの数より多いんだって」

暇を持て余したのかどうか知らないが、受付嬢がつぶやいた。

それはある特定の「誰か」に言った言葉ではなく、いや、もしかしたら何千キロも離れた場所にいる歯槽膿漏のキリンに言ったのかもしれない。確かに、彼女以外この空間に唯一存在する動物である「僕」に対して放たれたようには聞こえなかったが、僕は思わず彼女のほうを振り向いてしまう。

「じゃ、これは僕からの提案なんだけど、歯科医院をコンビニ化するってのはどう？」

無名の怪盗が、少しばかりの時間を盗んでいった。その間、治療用ドリルの音が空白の時間を埋めて、僕の上あごがその音に共鳴して痛んだ。

「それは違うと思う。すべての治療が商品化されるべきではないはずよ」

「冗談で言ったのさ」

「歯科医院のコンビニ化について、ゆっくり語る必要がありそうね」彼女はそう言って、次回の治療の予約日を探すためにカレンダーに視線を落とした。「来週金曜日の午後は？」

僕は「構わないです」と答えた。

「金曜日の午後という表現、どこか魅力的に聞こえないですか？」

「そう？ 時をあらわす普通の、世界共通の表現だと思うわ。水曜日の午後と木曜日の午後、一緒じゃないかしら？」

「小さいときに、夜更かしして外に出ると、そこに広がっている闇が力を蓄えているように感じたんだ。次の日に起こる何か素晴らしい出来事のために。次の日の朝に向けて膨張しているような感触っていうのかな」

「なんとなく分かるような、分からないような。でもそういう感覚をいつまでも持っていること

は大切だよね」

「ゆっくり語る必要がありますね」

僕と入れ違い様に、歯の抜けたおじいさんが入ってきた。歯がない人が歯の治療をする必要があるのかどうか聞きたくなかったが、それはまったくコンビニで買い物してしまうことと一緒にだったのでやめた。それから僕は、受付嬢のピンク色に手を振って歯科医院を出た。夜が膨張を始めそうな感じだった。

ヤラズボッタクリ

「僕の考え方はこうなんだ」と言ってから、シッターは爪を齧った。店の中には、モリバトのような声を出すウェーター、そしてオットセイのヒゲを持つ年齢不詳の男がいる。

「ラパ・ヌイ、つまりイースター島ね、そこにあるモアイ像について話すことになるんだけど。君でもモアイ像のことは知ってるね？」

「あまりバカにしないで欲しいな」と言って僕がオリーブを齧ると、オットセイの男がこっちを見た。シッターは薄明かりのテーブルの上を指でトントンと神経質そうに叩き、話を続けた。

「じゃ、あのモアイ像たちが、ラノ・ララク火山の石切り場から採られた石でつくられたことも知ってるね？」

「いや。それは知らなかった」

「これで君が持っているだいたいの知識については、ある程度把握できたよ」

店にひとりの女が入ってきた。彼女のフレグランスの匂いが、アルコールに浸かっていた僕の粘膜から入り込む。季節が変わり、高原の花が咲いたような感じだった。シッターが話を続ける。

「モアイ像はその石切り場で作られた後、どうやって今の位置まで運ばれたのだと思う？」

僕は、人生のすべてを投じて、あの何トンもあるモアイの石造を運ぶ悲しきの人々を思い浮かべた。大勢の人々、ある人は泣いていて、ある人は目が死んだまま重労働に耐えている。その中にまじってなぜかオットセイ男が出てくる。そして彼は平気な顔をしている。

「恐らく、丸太やヒモを駆使して、大掛かりな作業をしたんじゃないかな」

シッターは無言のまま3回、首を横に振った。そしてため息。オットセイの男がまた僕を見る。

「モアイ像はね、自ら歩いたんだよ。太陽に向かってね。別に日焼けを楽しんでいるわけではないよ。僕の言いたいことが分かったかい？」

シッターの言うことはなんとなく分かったが、なんとなく分からなかった。頭で考えても、理解できるような概念ではないことは明白だった。だから僕は、アルコールの力を借りてあくまでも「感覚的に」モアイの理論を捕らえようと思った。やがて僕はイースター島に吸い込まれる。オットセイの男はヒゲをピクピクさせて僕を見て、目が合うと首を捻った。いつの間にか彼はモアイの帽子をかぶっている。フレグランスの女はタバコを2本吸い、モリバトの男はなぜか勃起

していた。シッターは声を出さずに笑いながら、僕の次のアクションを待っている。

僕はきっと、あの乾いた土地に停泊するモアイに飛び乗らなければならないのだ。陽が傾く。多分、それが合図だ。女が吸うタバコの火を我慢して溜めた小便で消し、手を握り、オットセイ男が準備したモアイに乗る。モリバトが勃起したままピアノを弾く、チックコリアのなにかの曲で、シッターはそれに合わせて踊っている。女の手を握って。あとで気づいたのだが、僕が握ったのは女の手ではなくて、多分左利きのモアイの手だったのだ。

トーク・トゥ・サムウェア

プレタ・マンジェでパソコンを叩いている。

最近、良く足を運ぶ。店内にはジャズが響き、昼にはOLで店が埋まってしまう。ソファに腰を下ろす、アイスウーロン茶を飲む（僕はコーヒーが大の苦手だ）、今日一日の出来事を、まるで恋人に会うために通ったあの長い道を思い出すかのように、振り返ってみたりする。そう、あの道は、思い出そうとしなければ思い出せないものだから。

「一番好きな雰囲気ってなに？ どこ？」

「よくさ、行ったこともない場所を想像で答える人がいるよね」

僕はそう言ってから大きく息を吸って、その間に答えを探した。サエは僕に質問をしにくせに、「別に答えなんて待ってないわよ」的な無関心さで頬杖をつく。

僕は、都心を車で駆け抜けた昨夜を思い出した。夜、街は内包していた寂しさを急激に開放する。運転中いつも流しているCDを止める。窓を全開にする。昼間街を賑わせていた喧騒のかけらが拾い集められて、それらがジャズを奏でるのに時間はかからない。すると僕は夜と一体化する、夜は生きていて、どこかへ行こうとしているのが分かる。僕が頭で描くリズムやグルーブはことごとく裏切られ、夜は独自のそれを生み出す。いつだったか、まだ中学生か高校生の頃、田舎の夜が奏でるリズムと僕は完全に呼応していた。夜は僕のものだという自負があった。でも都会に出てきて、なかなか夜とマッチできないのはなぜだろう。

「僕はね、素晴らしいとか、素敵とか、そういった思考を止めさせる圧倒的な場所が好きなんだ。グランドキャニオンの夕暮れとか、エジプトのピラミッドとか、ね。分かるかな？」

「分かるわ。言葉にしてしまうと陳腐だってことね？」

「そう。愛の言葉みたいにね」

「白々しいものじゃなきゃ嫌じゃないわ」

「男が白々しくないように言ったとしても、女はそれを白々しいと判断するかもしれないだろ？」

そういう状況のとき、男と女はマッチしていないのだと思う。もしマッチしていれば、そんなことは起こらない。

「そんなことあり得る？」

「あるさ。夜、車に乗って、音楽を消す、そして窓を全部開け放しにしたまま街を走れば分かるよ」

遠くのほうで、名前も知らない巨大なビルの、まるで泣いているように点滅する赤が見える。その点滅は世界で一番静かに繰り返されている。鼓膜を震わす風が吹き込む。

「積極的な呼応の申し込みが、恐らく恋の始まりというものなんだらうね」

僕はそう言ってキーを回す、エンジンとともに夜が呼吸し始め、そして僕らはどこを目指すともなく走る。空には何もなかった。街にも何もなかった。街灯と喧騒のかけらを追い越す。隣でサエは、その瞳の中に街の息吹を取り込み始めた。僕はまた、あの道のりをなんとなく思い返してみる。

※時代は変わるもので、浜松町にあったプレタ・マンジェは閉店してしまいました。

イン・アンド・イン

公衆の男子トイレには便器が並んでいる。これは常識だ。たいていのトイレはそうなっていて、あまり例外はない。

一列に、7つの便器が並んでいるとする。その場合僕は必ず、真ん中の便器、つまり左から4つ目の便器を使用する。それで便器たちの左右のバランスを保っているのだ。便器の世界に均衡をもたらす、大切な心がけだと自負している。

一番左の便器、それはトイレの入り口に一番近く、せっかちな人、膀胱が破裂寸前の人、包茎の人が使用する。だから、便器のすぐ下の床の上は、うまく便器に吸い込まれなかった小便で汚れている。一番左の便器が悪いわけではない。僕はいつかバーで出会ったある男を思い出す。

ある男、その名をウメミヤ、と言ったが、彼の大便のしかたにはある特徴があった。実は、家のトイレで大便ができないのだ。彼はもよおすたびに、近くのコンビニに車で出かけ、トイレに駆け込む。

「コンビニのトイレが一番落ち着くんだ。家のトイレでウンコなんてできないよ。今まで一度だけ、賞味期限を大きく通りこした秋刀魚を食べたときに、長江の洪水のような下痢をしたことがあったんだ。そのときはたまらず家のトイレに駆け込んだよ。ものすごく気分が悪かった。いや、そこが自分のトイレだ、ってことに対してね」

彼はまるで、青春時代に体験した一目惚れを思い出すかのように、目を細めて回想する。

「車に乗ってコンビニに行く途中、少しだけウンコが顔を出すんだ。パンツが汚れない程度にね。そして僕は、そのウンコを肛門の中と外のそのギリギリの範囲で、行ったり来たりさせる。その出し入れが微妙でね。僕はその術を完全に身につけた。多分、世界一だよ。習得する前はね、出し入れするときに空気が混ざって、予期しない屁と一緒に中身が出ることがあった、それに卒倒するくらい臭いときがあたり、それは僕を少し悲しい気分にしたんだ、僕が糞主なのに、なぜ自分の糞を操れないんだろう、ってね。ときに糞は気ままなんだ。女以上に気分屋だ。扱いが難しい。少しでも気を緩めようものなら、その勢いは止めどないものになる。出し入れし過ぎても、ウンコの野郎は怒ってモリモリといっぱい出てきてしまうんだ。それを弄ぶまでに操れるようになるには、僕も相当の訓練を要したよ。日本語では“いなす”って言うらしいね」

僕はギネスをサーブしてくれる女のバーテンの目を見つめている。彼女はU字型とO字型のどちらの便器が好きなのだろうか？ 便座にはどちら向きに座るのだろうか？ 横？

「U字型の空いている部分に、ある人はペニスが入ってしまうんだ。じかに便座の下の便器にペニスに乗ってしまう」

「すごく冷たいんだらうね」

「冷たいらしいよ。でもそのおかげで縮むんだ」

「すぐ縮むことは大切だ。すぐ勃つことはできても、すぐ縮めることは難しい」

「海綿体の応用については、僕らはもっと訓練が必要みたいだね」

「僕はA型の便器を求める。両足を伸ばして踏ん張るんだ」

帰り道、僕はいつもより冷たいハンドルを握っている。車の座椅子が便器だったら、と、考えた。渋滞でもすごく便利だ。いっそのこと、すべての椅子を便器にしたほうが機能的かもしれない。

前を走るゴミ収集車、ローラーがヌルヌルと回り始める、僕の車はそのローラーにどんどん近づいていく。ブレーキを踏むつもりが、アクセルを思い切り踏み込んでしまう。でもすぐに、ブレーキの判断よりも正しかったと思えるようになった。僕は車ごと、世界一渋い快感とともにローラーの中に柔らかく吸い込まれる。これだ、これを待っていた、いつか出会えると思っていたが、僕はついにそれに出会うことが出来たのだ。

V I P ルームで脱糞の予感

キャラメルスチーマーを優雅に飲んでいる、カフェの中、静かなBLUE MOONが流れていて、火山で隆起した不規則な島々のように置かれたテーブル、年齢不詳の女、職業不詳の女、体と声が無駄に大きいオヤジが座っている。

僕の吐息がミルク臭いために——おそらく母性本能をくすぐったのかもしれない——年齢不詳の女がちらちらとこちらを見ている。出会いの予感がする。前にも言ったが（別に自慢ではない）、僕はえてしてこのような種類の「出会い」に直面することがある。それは、動物園で機嫌の悪いライオンと対峙できたときのような喜びをとまなうのだ。そのときライオンは、鼻先でクンクン、と相手の匂いを嗅ごうとする。そして今、僕の吐息はミルク味。

「良かったら」

年齢不詳の彼女は——見方によっては20代前半にも見えるし、30代で旦那と2人の子供がいるの、と告白されても不思議はない——僕に声をかけてきた。知らない人に声をかけるときのセリフ、ベスト3だ。ちなみに「すみません」「あの」もベスト3に入っているが、僕の場合は違う。「あれあれあれあれ——、初めてお会いしましたがそんな気がしないのは僕だけでしょーか——！！」である。決まりだ、間違いない。

「ここにあとで電話してもらえますか？」

少しも慌てることなく、まして頬を赤らめることもなく、彼女は僕に一枚のレシートを渡した、そこには携帯電話の番号が化粧ペンで書かれてあって、僕の方が幾分緊張しながら受け取った。彼女は、まるで社長の秘書が何の感情も持たずにキャバクラからのDMを社長に「郵便です」と届けるが如く、冷静で毅然として少し事務的だった。それが彼女を魅力立たせていたことは、間違いない。そして僕のほうがむしろ彼女に好意を抱き始めたことも、間違いない。やがて彼女はカフェから出て行った。

カフェを出る、1月にしては生温い風が頬を掠める。レシートの電話番号に電話してみる。すぐに彼女が出た。やはり秘書のような毅然とした声だった。しかし事務的ではなかった。その違いは大きい。

「あなたの目にちからを感じたの、それはある人が見たらもしかしたらいやらしい感じかもしれない、少し変態的な視線かもしれない、でも私には圧倒的なパワーを蓄えた眼力に見えたの」

彼女は僕が2回呼吸をする間、だいたいそんなことを言った。「変態」「いやらしい」どちらも僕が他人から言われる形容詞のベスト3に入っている。ちなみにベスト3のあと一つは「安心できない」だ。それから僕と彼女は、雑居ビルに囲まれたこじんまりとした公園で待ち合わせた。ハトたちが、散らかったゲロに群がっている。

「ごめんね、呼び出しちゃったりして」

「いや、僕自身、地球上でミジンコとナマケモノの次に暇だったからね。もう少しで地球一になりそうだったから、用事ができて助かったよ」

彼女は毅然とした表情を緩めて優しく笑った。その笑いはまるで、海をずっと眺めているとやってくる潮の満ち干の狭間のように、一瞬だけ時を止めた。

それから僕らは、バーで少し精神哲学的な話をしたあと、会社帰りの人たちで混雑した電車に乗った。彼女は少し変態的なところがあり（誰しも持ち得るものだ）、電車の中で触って欲しいの、と僕に打ち明けた。僕は「これが茶番だったら人生を棒に振る」というリスクに脅えながら、またそのリスクに飲まれそうになりながら彼女の腰から下に手を伸ばした。彼女は例の毅然とした表情を崩すことはなかったが、下半身は小刻みに震えていた。僕は抱えていたクリアケースの角で彼女の胸をつついたり、携帯電話のアンテナを脚の間に忍び込ませたりした。でも、結局そこまでだった。最後まで望んでいない女性に対しては、僕は偽善者的に紳士だ。彼女にとって僕は、彼女を満足させるだけの存在なのだ。のどちんこより明白な存在意義だ。ほら、こうしているうちにまた電話が鳴っている。

猿が持っていたモンキーレンチ

僕は相変わらずハワイ島にいる。

早朝、マグカップにインスタントの味噌汁を入れてお湯を注ぎ、寝起きのままコンドミニアムの受付近くにあるVIPルームに向かう。

太陽もまだ目覚めきっていない、芝生も萎れていて空気も夜明けの準備をしている。僕の足音がこだまして、寝ている誰かを起こしてしまわないか心配になる。特に未成年は責任が取れない。

ルームに入る、当然誰もいない、テーブルの上にはルールすら知らないチェス盤が置いてある、出来もしないのに適当に駒を動かしてみて、もしかしたら人間はチェスの駒のように誰かに動かされてるんじゃないか、だとしたら自分は何だろう、ルークかな、ルークの上にマカダミアナッツを一粒乗せられるかもな、と考えていた刹那、英語でおはよう、と声をかけられた。

Good Morningは、ネイティブだと、Goodはほとんど発音しないし、カタカナにすると「モーニン」と聞こえる、でもその女性のはっきりと「グッド」と発音したのでツアリストだな、ということが一瞬で分かった。

やあ、と言いながら彼女の目を見たら多分北欧系で、10代後半か20代前半だと思った。で、正直に言うと、この手に弱い。

一応、笑顔を続ける努力は、した。でも北欧系のピュアで満面の笑顔には立つところはあるが歯は立たない。苦し紛れに、間を埋めるための言葉が、しゃがれた声で出てしまった。

“Would you try miso soup?”

(味噌汁、吸う?)

まだ日が昇る前なのに、汗が吹き出る。ああ、なぜこのマグカップの中が洒落たコナ・コーヒーじゃないんだろう、そうだ、ここはハワイ島だ、コナ・コーヒーが自然な流れだ、多分コナ・コーヒーなら今の流れで恐らくメアドくらいは交換出来た可能性が高い、そしたらアバンチュールなんていう死語を思い出すくらいセンチメンタルジャーニーになっていたはずだった。

“Wow, I've never tried before!”

(凄い、まだ味噌汁試したことないのよ!)

おお！サンクス味噌汁。早起きは三文の徳だった。

アゲイン&ゲイン

昼間の喉が焼けそうな暑さが幾分か和らいで、陽が暮れたバンコクには南国の陽気さに似た喧騒が広がる。

スワンルム・ナイトバザール近くにあるホテル内のレストランに、価格はタイにしては高いが絶対に食べる価値のあるカレーが数種類ある。特に、エビのすり身が入ったグリーンカレーは格別で、僕はそれを食べに3回バンコクに来た。そして今回が4回目。もう、想像しただけで舌が勃起して、舌下から普段は出ないものがたくさん出る。

1回目の訪タイで知り合ったシリポーンという女性は、激辛で有名な東北地方の料理屋で踊り子をしていた子だ。日本人のメイドをやっていたことがあるらしく、カタコトで日本語が話せた。

「カズマ、あなたまたバンコク来たの。4回も。好きね」

「うん。バンコクが好きというより、シリが好きなのかもね」

アジアの女性は特にそうだけど、建前が通じないので危険だ。以前、中国の浙江省にある日本人街のクラブでは、何人もの女性に「好き」を連発したら女性陣同士で嫉妬しあってしまい大変な目に遭った。

「カズマ、どこのホテルに来た？」

「ホテル？ヒルトンだよ」

「ヒルトン？ちょっとトオイー。一緒にいく」

タイ人の女性は、小さい頃にきちんと栄養のある食事が出来ない子も多く、総じて華奢だ。シリも華奢で背も低く、少し色黒だけど目が大きくてずっと見ていると吸い込まれそうな魅力がある。

「一緒に行くって？」

タクシーに飛び乗る。部屋に荷物を置いて、猿の素早さでエレベーターを降りる。シリは健気にあとをついてくる。タイの匂いか何かわからないが、いい匂いがする。チャオプラヤー川は先週末までの雨で水かさが増えている、そのほとりに座ってシンハービールで乾杯する、トゥクトゥクのエンジン音が遠くで鳴り響き、シリは僕の顔を見て笑う、ずっと？ずっと？と聞いてくるがその意味を考えたら重くなりそうで、僕はシリの手を握って部屋に戻った。

- ミレニアム・ヒルトン・バンコクホテル

<http://www.hilton.co.jp/bangkok>

- スワンルム・ナイトバザール

http://www.soidb.com/jp/bangkok/shop/market/suan_lum_night_bazaar.html

ホッテントット

バスが時間通りに来ることはほとんど奇跡に近い。だから、炎天下でじっとバスを待たなくてはいけないケースが多々ある。それがメキシコらしいと言えばそうなのかもしれないが、日本の常識にどっぷりはまっていると、そんなことすらストレスになる人もいる。

「メキシコは初めて？」

首から汗が流れ落ちる、それを拭くまもなく、こんなクソ暑いのになんでそんな涼し気な顔が出るんだろうというくらいさわやかなメキシカン・レディーから声をかけられた。

「2回目だよ。1回目は25歳のときに来てね。もうチチェン・イツァには登れなくなったみたいだね」

「そうなの、残念」

「1回目に来たときは登れたんだけどね。その時も、カスティージョの下には救急車が止まっていたんだ」

「で、どうなのメキシコ？」

「好きだよ。だからカスティージョの階段を修復したい」

「出来るの？」

「出来るかどうかは分からない、でもやってみる」

「それが男よ」

夜のカンクン、街は別の街に変わる、バスは相変わらず時間にルーズだが、日本がはるか遠くの国というよりはまったく別の惑星に来ているような感じだ。でも紛れもなく地球だと確信するには何かが決定的に足りない。日本にあるものがメキシコにはない。メキシコにあるものは日本にはない。でもそれが何なのかは説明出来ない。いつでも言葉は陳腐だ。

ナイトクラブでまたその女とばったり会って、僕は幼虫入の酒、メスカルを一気飲みすることになった、女はそのときも「それが男よ」と言って笑って、シャツのボタンとボタンの間から手を入れていやらしく僕の右乳首を触った。

そこからはほとんど記憶がない。メキシコ人の男どもにペソをばら蒔いた気もするし、激しいダンスを踊った上に、日本人の新婚の女性にちょっかいを出した気もする、そのあと鼻の奥が焼けるように痛み出した気がして、それに店のフロアでゲロをぶちまけたのは僕だったような気も

する、とにかくほとんどカオスで、気がついたらホテルのロビーにあるソファで全裸のまま倒れていた。下腹部に激痛と違和感を感じて、見ると陰毛にガムが絡みついていた。悪いと思えることをすべてやったような最悪な気分だった。

それからまた眠りについたらのか分からない。もしかしたら夢かもしれないが、例の女がやってきて、また僕の乳首を触った、オーマイカスティージョ、右手にはメスカル、口移しで飲ませようとしている、ホワイドンチュー、ホワイドンチュー、と何度か言ってみたが自分でも何を言おうとしているのか意味がわからなかった、やがて女は口に含んだメスカルを僕の口に移し、それどころか舌まで忍ばせてきた、この世はカオスだ、秩序なんてウンコだ、乳首のスイッチを押してメスカルさえあれば実は何でも出来てしまう世界だと確信した。

●チチェン・イツァのカスティージョ

<http://redloop.blog.ocn.ne.jp/redloop/cat7433882/index.html>

ブラック・ワン・ネック（くろ・いち・くび） 2

遠い星なのに大きく見えて、近い星なのに小さく見える、わけがわからなかった。

「目標と一緒によ」

ユーユーは小さい頃から物分かりが良くて、美人ではないけど男にもてた。僕はテストを終わらせるのがクラスで一番早かったが、点数は一番悪かった。

「目標って？」

「明確な目標は、例えそれが難しそうな目標だとしても、輝いて大きく見えるのよ。逆に曖昧な目標は、それが小さくて叶いそうな目標であったとしても、ぼやけて小さく見えるの」

「現実主義者であってはいけないってこと？」

「そうとも言う。目標が小さければ、人生はその枠の中、つまり想定した範囲以下の、小さなことしか起こらない」

人生は面白い、若くても夢を諦めた時点で墓に向かって人生が進むらしい、おじいちゃんが出ていた、高望みはしたほうがいい、例え叶わなくてもチャレンジすることが重要だ。考えすぎると恐怖が行動力を奪う。

「ユーユーさ、今夜、泊まっていくよね」

「えっ」

「遠い星なのに大きく見えるんだ」

「私のこと？」

「もしそれが砂漠にいる便秘気味のラクダのことだとしたら？」

「遠慮なく肛門をつつきに行くわ」

僕は笑って飲みかけの水を吐き出す、それがユーユーのTシャツを少しだけ湿らせた、若さが永遠だったらいいなと思った、そしたらずっと楽しい、要するにバイタリティだ、行動も愛もセックスもすべてそこに帰結する、バイタリティを失うことが老化だ、そんなことを考えともなく、ユーユーの胸が爆発しそうな勢いで僕に襲いかかっている、それが事実だったり、そうじゃなかったり。でも窒息しかかっているのは確かだ。